



Title	『隆季集』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1983, 41, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『隆季集』の成立

三 村 晃 功

一

土御門中納言藤原家成の子で、保元三年非参議従三位を経て、正二位・権大納言に至り、寿永元年出家。『久安百首』の作者に追加され、『詞花集』以下に二一首の入集をみる平安後期の歌人、藤原隆季（一二七〇没年不詳）に私家集があったらしいことは、福井久蔵氏が『大日本歌書綜覧中巻』（大正15・8）で、『隆季集 写一卷集』はものに見えたれど夙く佚したるか」と推定されていることによつて予想されるが、現在のところ、隆季の私家集は探し得ず、それとは趣を異にする私撰集が伝存している。彰考館文庫と井上宗雄氏の御所蔵にかかる『隆季集』が当該書で、本書はすでに、「中世私撰集解題（その一）」（『和歌文学研究』第十四号、昭和37・10）と『和歌文学大辞典』（昭和37・11）の当該項目に、井上宗雄氏（後者は森本元子氏と共同執筆）による簡にして要を得た紹介がなされている。そこで、次に便宜上、『和歌文学大辞典』から当該記事を引用させていただきます、本稿の端緒にしたいと思う。

隆季集^{たかすえ}_{たかすえ} 伝本は彰考館文庫に『匡衡集』と合綴の一冊があり、明応^{めいおう}_{めいおう}二^に・六中旬右京亮量胤の本をもって写した由の

奥書がある^{小山}_{小山}。井上宗雄本も同系（文久三^{ぶんきゅうさん}_{ぶんきゅうさん}）みなもとのただなを書写）。春一四二、夏一〇二、秋六四、冬三三、釈教神祇・歳暮・祝各一、恋二五、計三七〇首を収める。「隆季集」とは題するが、実は中世成立の私撰集で隆季の集ではない。平安・鎌倉時代の和歌を部類したものである。作者名・会記はすべて取り払われている。

この井上・森本両氏の的確な記述によつて、『隆季集』の内容・成立の問題はほぼ明らかめられて、いまさら事新しく付加すべきことはあまりない。しかし、本書が「平安・鎌倉時代の和歌を部類した」撰集であることには違いないが、具体的にいかなる出典資料から、いかなる歌人の詠を採録しているのか、そして、本書はいかなる性格を有する撰集で、その撰集目的は何であったのかの言及は不可欠であろうし、また、本書が「中世成立の私撰集」には相違なからうが、その成立時期はおおよそいつころであるのかの検討も是非必要であろう。

かかる次第で、以下は井上氏らの成果に基づいた『隆季集』の出典資料の闡明をとおして成立の問題に言及した拙い報告であるが、大方の御叱正を賜わらば、幸甚である。

さて、『隆季集』の精査に入る前に、底本とした井上宗雄氏御所蔵の『隆季集』の書誌的説明をしておこう。本書は縦二・七厘、横一六・一厘の袋綴写本一冊。表紙は朱色下地に鶴の模様を押す。題簽は左肩に「隆季集」。内題も同じく「隆季集」。本文料紙は楮紙で、一面一〇行書。歌一首一行書で、歌題は本文より五字下げ。遊紙はなく、墨付三六丁。一丁オに「宮崎蔵書」「はなの屋」「堀田文庫」の旧蔵印と、「井上宗雄蔵書」の現蔵印がある。巻末に、「右隆季集右京亮量胤之本全ノ備用写留者也ノ于時明応二年林鐘中旬ノ尚保在判」なる奥書（墨書）と、「諸家伝補任云隆季権大納言正三位云々」○系図修理大夫ノ顯季四代孫四條権大納言正三位藤原隆季母加賀守ノ高階宗章女ノ夫林抄ニ歌多ク入レリ」なる注記（朱書）と、「文久三年十一月四日写之ノみなもとのたゝなを」なる識語（墨書）がある。彰考館文庫本の転写本と推定される。

ところで、『隆季集』が隆季の詠を収めた私家集ではなく、他人の歌から成る私撰集である点については、たとえば、「浦のかすみを」の例歌

- (1) 須摩のあまのこほりし袖の浦波に春は霞のもしはたれつゝ
(浦のかすみを・一四)
- (2) いく春の霞のしたに埋れておとろの道に跡をとふらん
(同・一五)

(3) 雪消る萩のやけ原霞こめたてぬ煙にもゆる若草
(同・一五)

のうち、(1)が『俊成卿女集』の俊成女の詠、(2)が『拾遺愚草』の定家の詠、(3)が『正治再度百首』の長明の詠であることから明白であ

らう。ここに、『隆季集』は私撰集であることが示唆され、『隆季集』の内容（性格）を把握する第一段階として、『隆季集』の収載歌の作者面からの検討が要請されよう。そこで、『隆季集』の実態を紹介する意味も含めて、現在までに確認しえた『隆季集』の収載歌三七〇首の典拠および作者を整理すると、次のごとくなる。

361	245	362	264	365	267	366	269	287	289	309	329	330	346	347	354	356	357	285
175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193
194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212
213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231
232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250
251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269
270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288
289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307
308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326
327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345
346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364
365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383
384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402
403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421
422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440
441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459
460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478
479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497
498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516
517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535
536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554
555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573
574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592
593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611
612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630
631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649
650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668
669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687
688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706
707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725
726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744
745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763
764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782
783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801
802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820
821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839
840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858
859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877
878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896
897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915
916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934
935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953
954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972
973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991
992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010

〔拾遺愚草〕	11・13・15・94・98・108・113・119・124・189・213・348
352・355・360	
〔頼政集〕	42・123・152・153・224・252・291・292・302・328・334・336
〔長明集〕	104・118・125・143・167・208・210・212・266・288・290・311
344	
〔宝治二年歌合〕	96(小宰相)・99(通忠)・101(有教)・105・168(蓮性)・106(師経)・107(下野)・109(少将内侍)・111(越前)・169(為氏)
〔正治再度百首〕	16・27・35・331・342・343・345(長明)
〔曾丹集〕	8・47・110・114・246・251・275
〔散木奇歌集〕	171・196・225・227
〔為尹千首〕	43・46・51・172
〔元真集〕	61・97・307
〔古今集〕	89(素性)・285(人麿)
〔天徳内裏歌合〕	122(中務)・146(兼盛)
〔源重之集〕	228・310
〔和泉式部集〕	103・229
〔堀河百首〕	92(顯季)・248(匡房)
〔新勅撰集〕	5(好忠)・272(読人不知)
〔桜井基佐集〕	154・297
〔家持集〕	186
〔亭子院歌合〕	74(是則)
〔素性法師集〕	73
〔兼盛集〕	306
〔金葉集〕	317(顯季)
〔千載集〕	318(道因)

出典資料		春	夏	秋	冬	恋	計
草根集	29	19	13	13	4	4	8
林葉集	8	20	13	7	8	4	2
宋雅千首	4	14	8	9	7	3	3
肖柏千首	11	4					2
古今六帖	11						4
俊成卿女集	32	38	30	15	13	10	13
拾遺愚草	44	40					13
頼政集	52						13
長明集							13
宝治二年歌合							10
正治再度百首	3	4	3	3	1	1	2
散木奇歌集	3	5	1	1	1	1	2
為尹千首	3	5	1	1	1	1	2
元真集	3	5	1	1	1	1	2
天徳内裏歌合	3	5	1	1	1	1	2
源重之集	3	5	1	1	1	1	2
和泉式部集	3	5	1	1	1	1	2
堀河百首	3	5	1	1	1	1	2
新勅撰集	3	5	1	1	1	1	2
桜井基佐集	3	5	1	1	1	1	2

ちなみに、この整理の注記をしておくならば、算用数字は『隆季集』収載歌三七〇首に仮りに付した一連番号であり、カッコ内の注記は当該歌の作者であることを意味する(個人の家集、定数歌の場合には省略した)。この整理によって、『隆季集』三七〇首のうち、三三八首の典拠および作者が明白になったが、なお整理して部立別出典資料表を作成すれば、次表のごとくなる。

〔新古今集〕	351(長明)
〔続古今集〕	316(俊成)
〔玉葉集〕	341(基忠)
〔続後拾遺集〕	183(匡房)
〔風雅集〕	71(定円)
〔出典不詳〕	1・4・6・12・18・19・22・31・41・53・72・75
76・91・100・102・155・161・178・188・241・250・255・271・276・280・300・332・337・338	

新古今集	兼盛集	素性集	亭子院歌合	古今集	家持集
		1	1		1
		1		1	
	1	1			
	1				
1	1	1	1	1	1
	計	出典不詳	風雅集	統後拾遺集	玉葉集
					統古今集
142		18	1		
102		5		1	
64		6			
37		3			1
25					
370		32	1	1	1

列挙して、『隆季集』の全貌の紹介をしておきたいと思う。

(たつ春のあした物へまかりてよみ侍りける・一)

(おなしこゝろを・二)

(ふるきなかめに・三)

(野霞・六)

(あしたの霞を・一二)

(ママ)

ハ分男 一カ

(淡雪・二二)

《曉鶯》・三二

(梅に鶯鳴けるを・四一)

(梅香·五三)

(川柳・七三)

(17) 下萌のふる木の柳下もえて煙物うき春の色かな

(古木柳・七五)

(18) あさあけの山桜戸の玉柳たれまつ花の友となるらん (七六)

(19) 早厥のもえ出ぬらん春のゝに焼原あさる人しけくみゆ

(わらひ・九二)

(20) 桜花をちのさとまで詠らんあたにをらすな春の山寺

(桜を見るころを・一〇〇)

(21) たすね見花の所もかはりけり身は徒の詠せしに

(おなし心を・一〇二)

(22) 世にふれはしとろに見ゆる山賤のおとろのかみも葵かけたり

(葵・一五五)

(23) 隠れ沼の底におふれる菖蒲草こめにひなてみる人は見つ

(あやめ・一六一)

(24) うち羽ふき今ぞ鳴なる時鳥卯の花月夜さかりなる比

(おなし・一七八)

(25) たれしかも初音聞らん郭公またぬ山路にこゝろつくまで

(杜鵑・一八八)

(26) 夏も猶雪けの末の水ならばふちの河こそ冬こゝちすれ

(水辺納涼・二四一)

(27) 七日ひのはやくれならん久かたの天の川霧立わたるへて

(七夕・二五〇)

(28) はかなさもよしや思ほし山さとのすゝのまかきの露の槿

(あさかは・二五五)

(29) 若なくと人にはつけそ小萩原分つゝ来てもつらきあはすて

(萩・二七一)

(30) 秋なから落葉もしらぬ松虫の声うつもれる野への初霜

(おなし・二七六)

(31) 玉梓のそら引かへす心ちして雲のあなたになる鷹金

(鷹の声遠くきく・二八〇)

(32) 故郷に来てかへるへき秋や猶紅葉の錦秋やそふらん

(紅葉・三〇〇)

(33) 雪すかる籬の竹のおとのみそ時々我をおとろかしける

(閑居雪・三三二)

(34) したにこそこのへの庵はさしつるに思はぬよはの雪のうはふき

(野宿雪・三三七)

(35) あらし降る神のしるしの柳葉に雪のしらゆふかけそへてけり

(雪中神楽・三三八)

以上の三二首が『隆季集』収載歌のうちの出典不詳歌だが、この出典不詳歌には作者注記のない点が惜しまれるとはいえ、新出歌の可能性は充分にあらう。

三

さて、『隆季集』の収載歌の典拠調査によって、三七〇首中の三八首の出典が明白になり、この数値は全体の九パーセントに相当するので、ここで『隆季集』の性格に一言しておきたいと思う。

『隆季集』が特定の歌人の私家集および定数歌などによって撰集されていることはすでに言及したとおりだが、ここで『隆季集』収載歌の出典調査によって明白になった三三八首の作者について整理すれば、次のごとくなる。

正徹 52首、俊恵 44首、宋雅 40首、肖柏 38首、俊成女

30首、長明 22首、定家・作者不記 15首、頼政 13首、好忠 8首、躬恒・俊頼 5首、貫之・為尹 4首、元真 3首、素性・兼盛・重之・和泉式部・匡房・顯季・蓮性・基佐 2首、人麿・家持・是則・中務・醍醐天皇・寄香・深養父・忠家・定方・道真・敏行・道因・俊成・為氏・越前・下野・師経・小宰相・少将内侍・通忠・有教・基忠・定円・読人不知 1首。

すなわち、『隆季集』の編者は、まず、正徹・宋雅・肖柏などの室町中期歌壇の実質の指導者の詠を中核にし、次いで、俊恵・長明・頼政などの歌林宛歌人の詠と俊成女・定家などの新古今歌人の詠を添加、さらに、貫之・躬恒などの古今時代の詠も付加して撰集している実態を、ここに知り得よう。したがって、これらの各時代を画する時期の著名歌人の歌はいかなる性格のものであるかを検討するに、まず注目されるのが『為尹千首』『宋雅千首』『肖柏千首』などの千首歌が、『隆季集』の主要部分を占めている事実である。ところで、これらの千首は千首歌のモデルとも称されている『為家千首』と同題で詠まれているので、『隆季集』がこれら題詠歌の最大級の歌書から採歌しているといふことは、『隆季集』の編者が題詠歌の手本ともなるべき歌で編纂した、いわば題詠歌の手引書のごとき撰集を編もうとした編纂意図を示唆している。この点は、『俊成卿女集』からの採歌が「洞院撰政家百首」を中心として「北山五十首」「千五百番歌合」「衛門管殿への百首」などの題詠歌で占められ、「拾遺愚草」からの抄出歌が「閑居百首」「関白左大臣家百首」などの題詠歌であることや、『林葉集』・『頼政集』・『長明集』・『正治再度百首』からの採録歌もすべて題詠歌群からの抄出であることから確認されよう。そしてまた、『草根集』からの正徹の詠もすべて題詠歌だが、

『隆季集』の依拠したのは日次系『草根集』なのか、類題系『草根集』なのか、いずれの系統なのであろうか。この点を明らかにするために、『隆季集』の「冬」部の次の七首を吟味してみよう。

(36) しくれには思ひそぬ白露にあらそひ置しねやのあふきを
(浦時雨・三一九)

(37) まくらかのこからし吹て窓うつや渡らぬ浪のしくれ成らん
(枕上時雨・三二〇)

(38) 草も木も霜のからすといへる名のなきをつれたる松の色哉
(松霜・三二二)

(39) さすか猶ゆくとし積る霜の松下葉色付散る風かな
(松間霜・三二二)

(40) 木の間もる日影にさへてさゝの葉の太山は霜に曇色哉
(葉・三二三)

(41) 日影さす軒端の霜のまたきよりたかぬあさを立てるさと人
(あしたの霜・三二四)

(42) 山川や朽て跡なき橋けたに絶／＼かゝる冬のあさかせ
(橋上霜・三二五)

この七首を『草根集』の両系統の伝本と比較するに、両系統とも(36)・(40)・(42)の歌題を「闇時雨」・「篠霜」・「橋霜」として収載している。『隆季集』がどちらの伝本に依拠しているかは分明でない。ただ、(42)の歌に『隆季集』が「橋上霜」の歌題を付したのは、類題系『草根集』がこの歌の直後の例歌に「橋上霜」の歌題を付している。そこで、それを『隆季集』の編者が誤記した可能性は臆測されよう。ところで、この七首の『草根集』内での配列順序をみるに、類題系統では、五一〇九・五一一〇・五一七七・五一七八・五一八四・五

二〇七・五二二（ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会編『草根集二』の歌番号による）のごとく整然としているのに、日次系統では、一〇四〇一・四一六一・七七六〇・一〇〇二八・九六五・一六二・八二九三（『私家集大成』所収の書陵部蔵『草根集』（五一〇・二二八）の歌番号による）のとおりアト・ランダムである。この点から、『隆季集』が正徹の歌を採録する際に依拠した『草根集』はおそらく、類題系であつたろうと推察されよう。そして、『隆季集』が類題系『草根集』に依拠していることは、『隆季集』に類題歌集『古今六帖』からの採歌があることと関連するが、同時に、『隆季集』の収載歌がほぼ題詠歌で独占されているという性格を確認するであらう。

ところで、これらの題詠歌の手本ともなるべき歌はほぼ原拠資料に付された歌題下に配置されて、『隆季集』の編者の手は加わっていない感じがするが、『宝治二年歌合』からの次の春部の

(43) 雲の上の山も木高き桜花みよのさかりの春にあふらん

（芳野）花を・九六

(44) みよしのゝ高木の山の桜花空より外にはふいろうかな

（甌花といふことを・九九）

(45) 尋ねいる花より花に日数経て山路の末にいくよとまりぬ

（花を尋るころを・一〇一）

の三首をみるに、いずれも同歌合では「山桜」の歌題が付いているのに、『隆季集』では注記のごとき歌題が付いている。この原拠資料と『隆季集』との歌題の異同は、『隆季集』が注記のごとき歌題（詞書）を付した類題歌集から採歌した可能性も推定されなくはないが、目下、そのような歌書は見出し得ず、ここは『隆季集』の編

者が例歌にもっとも即するように歌題を改訂した結果と考慮するのが妥当ではあるまいか。というのは、『俊成卿女集』の「洞院撰政治家百首」からの抄出歌である、すでに引用した(1)の歌の歌題が、原拠資料では「霞」であるのに、『隆季集』では「浦のかすみ」となっていて、そこに編者の賢しら（改訂）が認められるような事例が他にいくつか指摘されるからである。ここに、『隆季集』の編者の、基本的には手本とすべき例歌および歌題はそのまゝの形で転載するけれども、例歌により適切な歌題表記が可能な場合は、あえて原歌題を改訂するという収載方針を見出すことができる。その意味で、『隆季集』の収載歌および歌題には、編者の好尚の反映がいくらかみられるといえようか。

かように、『隆季集』の収載歌は、『古今六帖』からの優雅で知的趣向的な歌、「特に新古今以後の歌壇に迎えられて少なからぬ感化を与えた」俊恵・頼政・長明などの歌林苑歌人の詠、後嵯峨院歌壇の所産たる『宝治二年歌合』からの二条派流の温雅にして類型的な歌、室町前期の特に応永期に活躍した為尹や宋雅、室町後期の特に明応・永正期の歌壇の実質の担い手であった肖柏などの、平明にして典型的な古典情趣の歌など、いずれも題詠歌の模範となるような性格の歌がほとんどであるといつていいようななかにあつて、二条派流の歌とは趣を異にする正徹や俊成女などの詠が『隆季集』にはかなり収載されているが、この点はいかに考慮されるであらうか。思うに、正徹と俊成女の詠が『隆季集』にかなり収載されているのは、正徹が『正徹物語』で、「恋哥は女房の歌にし入りて面白きはおほき也」と指摘して、式子内親王・俊成女・宮内卿の詠を各々引用した後に、「俊成女の、哀れなる心長さのゆくゑともみしよの

夢をたれかためん 極まる幽玄の哥也」(日本古典文学大系本)と俊成女の恋の歌を評価していることや、また、心敬・宗祇らの連歌師に混じって正徹の言説を多く引用して、和歌・連歌の作法等に関する雑談を集めた『兼載雑談』に、恋の歌の手法として、「下もえにおもひきえなむ煙だにあとなき雲のはてぞかなしき 俊成女 これらを恋の本と被し申き」(日本歌学大系本)と俊成女の歌が賞揚されていることから明白なように、『隆季集』の編者は両者の歌を同系統のものと解していたからであらう。ところで、この両者の詠も歌題をいかに詠みおおせるかという参考歌としての観点に立つならば、『題詠歌の恰好の材料たり得ることは言を待つまい。ここには、『隆季集』の編者の好尚の反映があることはいうまでもなからうが、同時に、『隆季集』の成立時期の時代的好尚の反映もあるように思われる。

要するに、『隆季集』は編者の好尚とその時代性を反映した、題詠歌を詠むうえで模範たり得るような「古」「今」の歌で撰集された詞華集であるといえるであらう。

四

それでは、『隆季集』の成立時期はいつであらうか。この問題に示唆を与えるのは、すでに言及した「右隆季集右京亮量胤之本全」(ママ)備用写留者也／于時明応二年林鐘中旬／尚保在判」なる奥書で、明応二年(一四九三)六月中旬に、右京亮量胤の所持する『隆季集』を、尚保が書写した由である。しかし、量胤も尚保も、管見の範囲ではその生没年も伝記的事績もまったく不明であるので、奥書の記事に信憑性があるのか否か判断がつかかねる。そこで、『隆季集』の

内部徴証としてその成立時期を示唆する事例を探索するに、『草根集』『肖柏千首』『桜井基佐集』からの抄出歌を『隆季集』が収載しているという事実に着目する。すなわち、これら三作品の成立時期が判明すれば、『隆季集』の成立時期の上限はそれより以降ということになる。

まず、『基佐集』からの抄出歌は

(46) 神わざのたえぬみあれに葵草いくよかけても色はかはらし

(葵・一五四)

(47) かひかねにいよふ月のほるまで旅ねくるしきさよの中山

(續月・二九七)

の二首で、島原松平文庫本『基佐集』(私家集大成⁶)所収)によれば、(46)は「よしかたの入道」、(47)は基佐の詠だが、(47)の三・四句が「ふくるまでいねもやられぬ」とある点で多少の疑問が生じなくもないが、『基佐集』収載歌と判断して差し支えなからう。その『基佐集』の成立時期については、久曾神昇氏が「詞書、ことに他人の歌の詞書などを見るに、……晩年になって、詠草書留などを資料として整理したものであらう」とされるのに対して、稲田利徳氏は「晩年の成立かいはなは、まだ確定できない。」と判断を保留されているように、いまだ決定をみていない。そこで、桜井基佐の生没年だが、いずれも未詳とはいえず、稲田氏によれば、「文明・明応・永正のころに活躍した」由であるから、『隆季集』の奥書の明応二年は一応信ずるに足る記事と判断してよからう。

次に、『肖柏千首』の成立時期だが、これについては、(48) 夕暮のおなし乱を秋の風露にまかせよ野辺のかるかや

(刈萱・二六二)

(40)さのみなとふるゐも宿をかるかやの跡まで風は吹乱るらん

(おなし・二六二)

の二首が、(40)が肖柏、(41)が宋雅の詠で、『詠千首和哥上 宗雅 牡丹花』(内閣文庫本二〇一・四八四)に「荆簷乱風」の歌題下に収載をみるので、いわゆる『宋雅肖柏千首』の成立時期を問題にすればよい。この『宋雅肖柏千首』の成立時期については、同書の巻末に、『宋雅千首』のものとおぼしき「応永廿二年十月日」なる記事と、『文明元年初秋漢羽林郎將藤原為広』なる記事(実は、これは為尹の奥書)に続いて、「大永七年丁亥十一月十四日」(書陵部本の奥書には、続けて「九州肥後住人水俣瑞光書之」とある由)の記事があって、大永七年の記事が示唆を与えよう。しかし、井上氏によれば、『大永の奥書が兩千首にかかるとすれば已に兩千首は合せられていた訳だが、そう簡単にも断ぜられまい。』という⁽⁷⁾ことで、『宋雅肖柏千首』の成立時期は現在のところ分明でないといわねばなるまい。ところで、牡丹花肖柏は嘉吉三年(一四四三)生誕、大永七年(一五二七)没の歌人・連歌師であるので、『隆季集』の奥書に記す明応二年は肖柏五十歳に当たるので、『隆季集』の奥書の記事には大いに信憑性があると判断されよう。

最後に、類題系『草根集』の成立時期だが、現存諸本では、野坂元定氏本『草根集』の奥書に「永正三年臘月日」、京大付属図書館本『草根集』の奥書に「于時永正二年從孟夏至初冬漸書之早」と記す記事がもっとも古く、稲田利徳氏によれば、その成立は「少なくとも室町末期には成立していた。」⁽⁸⁾由であるが、その正確な成立時期は現在のところ確定していない。ところで、類題系『草根集』は日次系『草根集』に依拠して成ったはずで、松下正広が日次系『草

根集』を編んで、一条兼良に序を要請したのが文明五年であるから、類題系『草根集』が『隆季集』の奥書記事の明応二年ごろに編纂された可能性は充分あるであろう。ここにも、『隆季集』の奥書記事は信憑性を有すると判断されよう。

以上の『桜井基佐集』『肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の検討から、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月という記事は信用するに足る内容であることが判明した。したがって、『隆季集』の成立時期の上限は少なくとも明応二年六月中旬以降と推定してほぼ誤りはないといえよう。となると、この時期は、文明後期歌壇の最高指導者で、三条西実隆・姉小路基綱などの公家や地方大名の歌道師範となって活躍していた飛鳥井雅親が没した直後ではあったが、作歌活動は活発で、宮廷では歌学研究も盛んに行われて、『風雅集』から『新統古今集』歌の類句集たる『新編和歌類句』(延徳二年成立)や、万葉歌の事項索引ともいふべき『万葉類集』(延徳三年成立)などの作歌手引書も生まれる一方、連歌の方面でも、宗祇を中心に肖柏・宗長等が活躍、『連秘抄』(長享三年成立)や『下草』(明応二年成立)、『新撰菟玖波集』(明応四年成立)などの作品が生まれているので、『隆季集』もこうした歌壇の趨勢や時代を背景にしているの所産と考慮すれば、その性格、存在意義も理解されよう。すなわち、「古」「今」の題詠歌の手法ともなるべきような詠歌で撰集されている『隆季集』の存在意義は、その成立時期における作歌の規範となるべき題詠歌の詞華集を編纂、提供しようとする企図した編者の実践結果にあったといふことができるのではあるまいか。その編者には、肖柏・基佐など連歌に関わる人物の詠歌を収載していることなどから、連歌と関わる歌人などが想定されようが、具体的人物

となると、目下のところ、確証が得られないので、編者の問題は今後の課題にせざるを得ない。また、『隆季集』なる集名も巻頭歌の詠歌作者が不詳のため、これまた、何故にかかる集名となったのか分明でない。

なお、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月中旬なる記事は、現在その成立時期が分明でない、『桜井基佐集』『宋雅肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の下限を、それぞれ明応二年六月中旬より以前と規定する意味で、『隆季集』のこれらの作品の成立時期の問題を究明するうえで果たす役割は計り知れないものがあるといつてよからう。この点、『隆季集』の内容そのものの有する価値とは別個の、いわば派生的価値とでもいふべき性格のものであるが、『隆季集』の価値を側面から高める貴重な要素になっていることには相違なからう。

注

(1) これは『古今六帖』収載歌で、作者注記のない歌数で、具体的には、『隆季集』の収載歌の典拠および作者の整理のところで歌番号を指摘し
ておいた。

(2) 『為家千首』とはいっても、藤原為家がみずから出題した「前大納言為家卿中院亭会千首」のことで、慶安三年版『明題部類抄』には、
当該歌題が掲載されている。

(3) 『和歌文学大辞典』の「俊恵」の項（田中裕先生執筆）。

(4) 『群書解題第九』（昭和35・11）の「桜井基佐集」の項。

(5) 稲田氏「桜井基佐の作品における俳諧的表现」（『連歌俳諧研究』第
四〇号、昭和46・3）。

(6) 注5に同じ。

(7) 井上宗雄氏『中世歌壇史研究の室町後期』（昭和47・12）の二〇六頁。

(8) 稲田利徳氏『正徹の研究』（昭和53・3）の五四三頁。

〔付記〕 本稿を草するに際して、貴重な御架蔵の『隆季集』写本一冊を貸与
してくださった、井上宗雄氏に深謝申しあげる。なお、本稿の概要の一部
は和歌文学会第二十八回大会（昭和57年10月10日、於共立女子大学）で発
表したが、その際御示教賜った、井上氏をはじめ、福田秀一・島津忠夫・
鶴崎裕雄の諸氏にも御礼申しあげる。ちなみに、本書は「花園大学研究紀
要」第十四号（昭和58・3）に翻刻したので、御参看賜りたく思う。